辻本 悟史　氏の学位審査結果の要旨氏の学位審査要旨

主査：中邨 智之
副査：中村 加枝、湊　直樹

左室拡張障害は、たとえ心室収縮能が保たれていても心不全の原因となる。ドップラー心エコーで左室拡張障害を反映するとされる指標もあるが、前負荷や血圧の影響を受ける。最近、経胸壁心エコーで左室後壁の壁厚を収縮期・拡張期で測定するだけで得られる diastolic wall strain (DWS)という指標が、左室拡張障害の新たなマーカーとなることが報告された。本研究では、心エコー上、心機能の保たれた患者の予後を DWS で予測できるかどうかを調べた。対象 962 名中、147 名の低 DWS 群は、平均観察期間 43±32 ヶ月で心血管イベント発症を有意に多く発症した。多変量 Cox 比例ハザード解析で基礎疾患・他の変量の影響を除外しても、低 DWS は独立した心血管イベント発症予測因子であった（ハザード比 1.87、95%信頼区間 1.04 - 3.36)。さらに他の既知の予後予測因子に低 DWS を追加すると、心血管イベントのリスク層別化の精度が向上した。本研究は、心機能の保たれた患者の心血管予後予測に有用な指標を提供するものであり、学位に値する。